農の心を伝える
中山農村歌舞伎

昔、「島は芸どころ、歌舞伎どころ」といわれた小豆島。中山農村歌舞伎の起源は江戸時代中期といわれ、明治・大正期には、島全体で歌舞伎舞台が大小30、役者は600〜700人いたという記録が残っていますが、今では中山地区と土庄町肥土山地区のみとなっています。春日神社の奉納芝居として今も続く中山農村歌舞伎は、毎年10月の日曜日、保存会によって4幕を上演。子ども歌舞伎も見られる他、観客は家々から割盒(わりご)弁当を持って桟敷席(さじきせき)に集まり、酒を酌み交わしながら見物します。

写真右：型で抜いたご飯と煮しめ、卵焼きなどが入った割盒弁当。
写真左：練習中の舞台では、子どもたちの一生懸命で気迫あるせりふが飛び交います。

地域の絆を灯す
虫送り

虫送りは、約300年前から伝わる伝統行事。半夏生（夏至から11日目）の頃に、火手(ほて)と呼ばれる松明を田にかざしながら畦(あぜ)道を歩き、害虫を退治し豊作を願うもの。ゆらゆらと揺らめく幻想的な光の列が千枚田に連なります。中山地区では数年間途絶えていましたが、映画「八日目の蝉」で重要なシーンとして、この虫送りが行われたのをきっかけに平成23年（2011）に復活しました。親子連れなどが高低差100mの坂道を「灯せ、灯せ」の声をかけながら下っていきます。

写真上：5月下旬から6月にかけてホタルの乱舞が見られる中山ホタルの郷。
写真下：中山棚田オーナー制度では田植えや稲刈りが体験できます。